
それは、夢のような時間

MRZ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それは、夢のような時間

【Nコード】

N1591R

【作者名】

MRZ

【あらすじ】

それぞれの本編終了後、三つの世界は平和を謳歌していた。だが、凜のうっかかりをキツカケに英霊達が、ライダー達が士郎達の世界へやってきてしまう。

そこから始まる不思議な時間。そして、その最後に待つものとは…

…

（前書き）

これは、自分が投稿している三作品のクロスものです。なので、出来れば三つの作品を読んで頂けるとより楽しんでもらえるかと思えます。

これは一発ネタに近いものです。なので、必ずしも本編が同じような結末を迎えるとは限りません。それをご了承して頂いてからご覧ください。

あの事件から一ヶ月。そろそろ季節も春が近付いてきていた。土郎は調理師学校への出願も終え、凜はロンドンへの留学準備をつい先日終えた。桜もイリヤも、土郎がコペンハーゲンを譲り受けるまでに接客を勉強し、店員になる準備を進めている。

切嗣はアイリ達四人とセラとリズを連れて新婚旅行へと向かった。とは言っても、アイリが結婚した時に行けなかったから行きたいと言ったためだ。故に行き先は特に決めていないが、大河がいるのでおそらくただでは済まないだろうと誰もが思っていた。まあ、念のための用心棒としてバーサーカー達がいるので、そこまで不安はない。

一方セイバー達は、四人揃って居間でゲーム中。つい最近楓が欲しいと言って、土郎のバイト代で購入した大人数でやれるパーティーゲームだ。中々白熱しているらしく、先程から何度も叫ぶ声が聞こえる。その内現実で戦い出さないか不安だが、そうならない事を切に願うしかない。

その楓は、鐘と由紀香の三人で大学入試が近いために時寺家で勉強中。衛宮邸を避けた理由は楽しいから楓が勉強をしなくなるため。そう鐘と由紀香が思い、大反対する楓を封じ込めてそうなったのだ。ちなみに、最近衛宮邸に住人が一人増えた。

「サクラ、洗濯物は終わりました」

「ありがとうライダー。じゃ、もう休んでくれていいから」

ライダーである。彼女は、間桐家で慎二とフランがいちゃつくと
言って桜を頼ってきたのだ。そう、桜は既に増改築が終わった衛宮
邸に自室を完全に所持していて、切嗣が言うには、大河から元から
桜は住んでいるようなものと認める発言があったから容認したら
いい。

だが、ライダーが住むようになってから士郎は度々淫夢を見るよ
うになった。それを切嗣に相談すると、彼はやや困ったような表情
で何とかするから、決してそれを桜には言わないようにと告げ、そ
の日以来淫夢は無くなった。代わりにライダーが定期的に献血（実
際は吸血）を士郎に頼むようにはなったが。

とにかく、衛宮邸に今いるのは、士郎を初めとするいつもの者達。
平和な時間が過ぎると誰もが思っていたそんなある日。だが、それ
は唐突に破られる。そう、凜の部屋から聞こえた轟音と閃光によっ
て……

闇の書事件解決から数ヶ月。懸念していたリインの消滅も何とか
乗り越え、なのは達は平和な日々を謳歌していた。そして春にはユ
ーノとはやて、アリシアが入学する事により益々賑やかになる事が
分かって、なのは達は新学期を今か今かと待ちわびていたそんな頃、
セイバー達は相変わらずの時間を過ごしていた。

セイバー達翠屋組は仕事。アーチャーはリインと家事に精を出し、
ランサーはプレシアやリニスの手伝いやシグナムとの手合わせ。ラ

イダーはノエルやファリン、イレインと共にメイドとして働き、小次郎は飄々と庭仕事をしながら、時に美由希や恭也との試合。ザフィーラはヴィータと共に公園へ行くようになり、老人会との関わりを持つようになっていた。

そして、今日はなのは達にとって楽しみにしていた日だった。月村家の庭になのは達子供達とセイバー達英霊達、それにリインを初めとする守護騎士達やプレシアにリニス、アルフもいる。今日は、最近歩けるようになったはやてを祝う会だった。

残念ながら士郎達は仕事。恭也達大人組は買出しに行っていていない。なのは達は設営などをするために早めに来ていた。とはいえ、懸命に働くのはアーチャーなどの一部だけ。ランサーや小次郎などは準備する者達を眺め、談笑しているのだから。

「少しは動け」

「あ？　こんなにいるんだ。下手に全員で動くよりも、少数精鋭でやる方がいいじゃねえか」

「ランサーの言う通りよ。私達はこういう事に向かぬ故、ここで邪魔にならぬようにしておる」

アーチャーの言葉に二人がそう返すと、周囲が苦笑いを浮かべた。確かに言う事はもっともだったからだ。しかし、それだけではない。そう返す二人が笑みを浮かべていたのだ。アーチャーを軽くからかうように。それがおかしくて仕方ないのだから。

アーチャーも二人を説得するより動くべきと判断したのだろう。ため息を一つ吐いて設営に戻ったのだ。だが、最後に捨て台詞を忘れないのがアーチャーのアーチャーらしさだった。

——ならば、その猫達のように、せめて気分を和ませるぐらいはして欲しいものだ。

それに猫達が一斉に声を上げたので、全員が声を出して笑った。言われたランサーと小次郎さえも笑っていた。そんな和やかな時間を過ごしながら、設営も終わった。そして、後は恭也達が戻ってくるのを待つだけだったのだが、そこへ予想だにしない現象が起きた。突然周囲を目も眩むような光が包んだのだ。それになのは達は覚えがあった。それは、ジュエルシードを全て使った時。その輝きにどこか近いものがあったのだ。

（何！？ 何が起きたの！？）

戸惑うなのは達。そして、その姿は光と共に庭から消えるのだった……

邪眼を倒した仮面ライダー達と六課。だが、予想されていたライダー達の帰還は起きず、そのまま時間が過ぎていた。そして、事後処理も落ち着き始めた頃、いつものように早朝の訓練場に五代達の姿があった。

怪人の襲撃は無くなったとはいえ、もしかすれば今後も邪眼のように、世界の壁を超えた怪物が現れる可能性はある。それを考慮した光太郎は、自分達が元の世界に帰る時がくるまで、六課の者達に怪人戦を見越した訓練をしようと決意した。五代達も光太郎の思いを汲み取ってそれに付き合う事になり、現在のような状況になっていた。

「さ、今日は誰が相手してくれるツスカ？ 龍騎ツスカ？ アギト

ッスか？」

「何で俺や光太郎さんの名前は呼ばれないの？」

ウエンディの挙げた中にクウガとRXがない事に気付き、五代はそう尋ねた。それにセインが苦笑しつつ答える。

「いや、だってRXとクウガは別格だし」

「バイオとロボを封印してくれるならやってもいい」

「クウガはあ、金の力無しでね？ あれ、凄く怖いから」

ノーヴェが告げた内容に光太郎が苦笑し、クアットロの言葉には五代が苦笑いを浮かべていた。見ればなのはやスバル達も同じように思っているのか、それを嗜めたりしないのだ。それが余計に五代と光太郎の苦笑を強めた。

そんなどこか平和な雰囲気が漂う中、ジェイルが顔を出した。隣にはギンガがいる。どうやら、ギンガの出向も終わりを迎えたらしく、そのために挨拶をしにきたらしい。その話にスバルが残念そうな表情を浮かべるが、ギンガはそれに笑みを返した。またすぐ会える。そう優しげに告げて。

スバルはその言葉に嬉しそうに頷き、サムズアップを送る。それにギンガもそれを返した。そんなやり取りに全員が優しく微笑む。あのゆりかごでの決戦。挫けそうな気持ちを支えた要素の一つ。それは、彼らにとってはもう”魔法”と呼べる程の力を持っていたのだ。

そして、そんなナカジマ姉妹の仲の良さを感じさせる光景を見つめていた五代達だったが、ふと誰かに見られているような感覚を覚

え、ライダー四人だけが一齐に同じ方向へ視線を向けた。するとそこには……

「お、お前は……」

「久しぶりですね、アギト。それに、初めて会いましたね。黒い太陽、黒き闇、そして……」

「あんたが翔一さんの世界の神様かよ！ 一体、何しに出て来たんだ！」

青年の言葉を遮るように真司はそう叫ぶ。その異様な雰囲気にも誰かが動く事が出来なかった。しかし、もし彼がこちらに敵対する意思を見せれば、即座に戦えるように心構えだけはしている。それを感じ取ったのか、青年ははっきり告げた。自分は戦うために来たのではないと。

それを聞いて、翔一や光太郎から鋭さが消える。五代はどこか安心したように息を吐き、真司は拍子抜けしたのか小さく声を漏らしていた。そんな四人を見て、青年は一言だけ告げた。

——貴方達を元の世界に戻す時が来ました。

それに五代達は表情を変え、なのは達は揃って息を呑んだ。五代達にとっては待ちわびた。なのは達にとってはどこかで恐れていた言葉。それを聞かされ、全員が困惑を見せる。だが青年はそれに構わず、静かにその手を五代達へ向けた。

それに誰もが妙な迫力を感じた。だが、不思議と恐怖はない。安心感を感じるはずはない相手なのだが、それでも何故かそれを止めようという気は起きなかった。

「心配いりません。彼ら仮面ライダーは、悪ある所に必ず現れます。そして、彼らはある意味不滅。それは、私よりも貴方達の方が良く知っているはずです」

「……そうだね。それに、会いたくなったら会いに行けばいいのさ。私が必ずそれを可能にしてみせる」

青年の言葉にジェイルはそう応じ、周囲に宣言するように告げた。その声に込められた力強さに誰もが笑みを浮かべ、頷いた。それを見つめ、青年も気付かれないような小さい笑みを見せる。そして、その手から何か力が放たれようとした時だ。

——これは……異世界からの干渉ですか。下手に抗うのは危険でしょうね。ここは……

そんな青年の声を聞きながら、五代達は揃って意識を失うのだった……

閃光が消え、士郎達が目を開けるとそこには信じられない光景が広がっていた。なのは達と英霊達がそこには勢揃いしていて、その横には同じように何が起きたのか理解出来ないままの五代達六課がいたのだから。

しかし、そんな状況からいち早く抜け出し、現状の異常性に気付いたのは、なのはの隣にいたセイバーだった。その視線は一人の人物へ向けられていたのだから。

「し、シロウ!？」

「何驚いてるんだセイバー。ん？ 待てよ。セイバーは俺を主って呼んだはずだ。それに、居間でオルタ達とゲームしてなかったか？」

目の前に現れたセイバーの様子がおかしいと思い、士郎は考え始める。だが、そんな士郎の前方では六課が幼い頃のもの達を見て、驚くやらはしゃぐやらと騒ぎ出していた。

「なのはさん、可愛い！」

「ふえ？ お、お姉さん誰ですか？」

「ちよつとスバル落ち着きなさい。ゴメンなさいなのはさん。すぐ静かにさせるんで」

見も知らない年上に敬語を使われ、困惑するのは。そんなかつての自分を見て、なのははどこか驚きながらも苦笑していた。あの頃の自分なら確かにそんな反応を返すだろうと思ったからだ。

しかし、そんな中、フェイトだけは信じられないといった表情で、一点を見つめていた。それは幼い自分とアルフと一緒にいる忘れるはずのない者達。

「か、母さん……リニスにアリシアも……」

「？ どうして名前知ってるの？」

「もしや……貴女はフェイト、なのですか？」

知らない女性から名前を呼ばれ、アリシアは不思議そうに首を傾げるが、リニスはスバルやティアナの反応からその正体に気付いた。

「そう、だよ……フェイトだよ、リニス」

「大きくなると、こんなに美人になるのですね。……それと、こちらでは私は消えたのですか」

リニスがどこか辛そうに呟き、フェイトはそれに何とも言えない。しかし、そんな二人へプレシアが声を掛けた。

「フェイト？ 本当に……こんな風に成長するのね」

その優しい声にフェイトは全身を震わせる。自分がどんなに望んでも聞けなかった声。それが、今こうして聞ける。もう二度と会えるはずのない存在。それと会えて、そして夢のような会話を交わせる事にフェイトは心から感謝を叫びたかった。

そんなフェイトの反応からプレシアとリニスは目の前の存在が、どんな境遇にあったのかを薄々だが感じ取った。きっと、ランサーがいなければ辿ったであろう結末。それを考えれば、その後二人がどうするかは決まっていた。

「フェイト、聞いて欲しいの。私は貴女が愛してくれたプレシアではないわ」

「……そうですよね」

「ええ。でもこれだけは知って欲しい。どの私も貴女を絶対に愛していたわ。ただ、それを素直に出せないまま死ぬしかなかったのよ」

プレシアはそう言って、フェイトの手を握った。その温もりにフェイトは視界がぼやけていくのを感じた。

「アリシアを愛する事で自分を保っていた。だから、貴女へ愛情を向ける訳にはいかなかった。それでも、貴女の想いは、貴女の心は伝わっていたわ。私もそうだったの。気付けたのは、本当にちょっとした奇跡だったのだから」

「……母さん」

「許してくれとは言えない。でも、これだけは言える。ありがとうフェイト。貴女がいたから、私は最後に笑っていられたはずよ」

その言葉にフェイトはプレシアの体を抱きしめた。ありったけの感謝を込めて。目の前の存在は、自分が母と慕った相手ではない。それでも、その言葉は母のものだ。もう聞けないと思っていた愛する母の声。それが告げた感謝の言葉。それを心から嬉しく思い、フェイトは十年以上の想いを込めてその体を抱きしめた。

そんなフェイトに応えるようにプレシアもその体を抱きしめた。大きくなった姿を見て、最初は戸惑いしか感じなかった。だが、その自分に向ける視線がジュエルシード事件以前のものに似ていた事から、プレシアは気付いたのだ。このフェイトは、自分が愛情を注ぐ事をしなかった存在なのだと。

そんな二人を見つめ、涙を流すリニス。そして、どこか不思議そうに見つめるフェイトとアリシア。

「ね、フェイト。どんな気持ち？」

「うん……突然お姉さんが出来たみたいな感じ、かな」

姉妹はそんな風に話して、プレシア達を見つめた。その横では騒ぎに気付いたセイバーズが庭に出て、余計に混乱を招いていた。

「む、セイバーが二人とは」

「それより、私には聞きたい事があります。貴女はどうしてシロウを主と呼んでいるのです？」

ルビーの言葉にセイバーはそう返し、視線をもう一人の自分へ向けた。それにセイバーは少々口ごもる。

「それは……えっと」

まさか四人で士郎の呼び方を取り合った結果とは言えない。何故なら、どうも目の前の自分は、ちゃんとしたサーヴァントとして召喚された事がありそうだったからだ。もし、自分達が士郎と既に男女の関係で、将来を誓い合った仲だと知ればどう反応するか分からない。

故にセイバーは出来るだけ慎重に答えようと考えていたのだ。だが、そんな事は関係ないとばかりにオルタがはつきり告げた。

「マスターの呼び方をみなで取り合った。その結果、そうになっただけだ」

「……そうのですか」

どこか信じられないと言った感じのセイバー。その声に、セイバーはもう開き直るしかないと思い、力強く頷いてみせた。

「……ええ。オルタの言う通りです」

それを聞いていたアーチャー達四人は揃って笑った。あのセイバ

「が士郎の呼び方を取り合っただけではなく、それを認めてみせたのだから。これは彼らにとっては面白い以外の何物でもない。しかし、そんな四人だったが、オルタやリリィ、ルビーの存在は不思議でしかなかった。」

自分達と同じサーヴァントなのだろうとは思う。しかし、セイバーに似ていながらどこか違う印象を受けるのだ。そう、同じセイバーでありながら異なる結末や起源から生まれた存在。そんな風に感じていたのだ。

こうして、互いに知り合いというか共通点がある者達は、それぞれで会話をしていた。だが、五代達はやや浮いた形となり、どうしたものかと考えていた。見れば、ジェイル達も同じような雰囲気だ。それに気付いた士郎が、五代達へ近付いて声を掛けた。士郎もセイバーを初めとする英霊達が悉く自分の知る者達とどこか違うため、その相手を桜やイリヤへ任せたのだ。そんな中見つけた自分と同じような空気感の相手。それを何とかしようと思い、士郎は動いたのだ。

「あの……」

「あ、はい」

「俺、衛宮士郎って言います。立ち話もなんですし、とりあえず中へ」

「ありがとうございます。あ、それと俺、こういう者です」

五代は士郎の申し出に嬉しそうに返事を返し、懐から名刺を取り出した。それを受け取り、士郎はどこか不思議そうな声でそれを読み上げた。

「夢を追う男……二千の技を持つ男……五代雄介」

「はい！ よろしく士郎君！」

笑顔のサムズアップ。それに士郎は何とも言えない力強さを感じて、笑みを見せた。それに五代も頷き返して和やかな空気が漂う。しかし、そこへこの原因とも言える者が現れるのだった。

「やつちゃったわ。上手くいくと思ったんだけど……って、誰よ？ この人達」

そんな凜の言葉にアーチャーが懐かしく思いながら、いつもの調子で告げた。

「またうっかりをやらかしたのか、凜。どこの世界でも、君は揺るがないな」

「いきなり何よ！ というか、何でアーチャーがここにいるのよ？ 今日はお父様達の護衛で出かけたはずでしょ」

その言葉にアーチャーの顔が若干驚きが変わる。そして、視線を士郎へ向けてこう告げた。色々と話し合う事がありそうだと。それに士郎も頷きを返し、全員は道場へ向かう事になるのだった……

それぞれの世界の簡単な説明と話を終え、誰もが同じ感想を抱いていた。異なる並行世界が混ざり合った。しかも、どうも海鳴から来た者達は原因に心当たりがないが、ミッドチルダから来た者達は

その原因になりそうな事に心当たりがあったのだ。

しかも、どうやらそれも凜のうっかりが原因らしく、それを聞いて凜はどこか恥ずかしそうに顔を背けた。だがそれでも、悪いのは自分ではなく、そんなタイミングで世界移動をしようとしていた方だと言いのけたのだからいい性格をしている。

そして、難しい話が終わったのを理解した瞬間、幼い方のはやてが手を挙げた。それに誰もが視線を向ける。

「あの、ちょう聞きたい事が大人のわたしにあるんやけど」

「何やる？」

「その小さいリインは何や？」

自分から質問されるといって稀有な体験に、どこか苦笑しながらはやてはその言葉に納得しながら答えた。

「この子はリインフォー スツヴァイ言うて、うちの末っ子。アインがユニゾン出来なくなってもうたから生まれた子や」

「あ、そっちもそうなんや。こっちのリインももうユニゾン出来んです」

「つかぬ事を聞くが、そちらはどうしてユニゾン出来ないのだ？」

「あ、それはまず邪眼っていう奴が、アインさんから機能のほとんどを奪ったんです。おかげでバグも復活しなくなっただけですけど、ユニゾン機能も壊れちゃって。修復は出来るんですけど……」

アーチャーの問いかけに翔一がそう答えると、それにアーチャー達が揃って疑問を浮かべた。直せるのなら直せばいい。そう思ったからだ。だが、ただ一人リインだけがそれに理解を示した。

「バグまでも直る事になりかねない。そうだな？」

「……はい」

その声に滲んだ悔しさにアーチャー達も納得した。彼らも恐れたバグ。どうも、それは並行世界でも同じように猛威を振るつたようだ。だからこそ、翔一の声に秘められた思いも理解出来たのだ。無力感。助けになれぬその感覚を知っているからこそ、翔一の声には悔しさが込められていたのだろうから。

「にしても、そっちもリインさんが助かって良かったわ」

「そうだね。でも、なのはちゃん達って偉くなるんだね」

アリサの言葉にすずかも頷いて、先程聞いたなのは達の現状を思いだし、どこか感心したように告げた。それに両方のなのは達がやや困ったように笑みを見せた。

「「偉くなりたかった訳じゃないんだよ……」」

「「気が付いたらこうなってた……かな」」

「「ま、わたしはどこかそうなるんやないかと思っと思った」」

込められた思いは違えども、その言葉はまったく同じ。その見事さに六人を除く全員が笑った。そんな周囲に六人も笑い出し、道場

に多くの笑い声が響く。そんな和やかな雰囲気のまま、三つの世界の交流は続く。

会いたかった士郎達に会え、なのは達はどこか嬉しそうだったし、五代達はセイバー達と出会った事で、自分達が知るよりも幸せそうにしているなのは達に微笑みを浮かべ、セイバー達は未来のなのは達を襲った災厄を、五代達が退けてくれた事に感謝していた。

ただ、プレシアはジェイルの存在にどこか複雑だったが。そんな三者だったが、暗黙の了解のように、ある事だけは話題にしないようにしていた。それは、なのは達の世界の未来についての詳しい話既に細々した箇所の違いがあるなのは達だったが、それでも何が原因で未来が大きく変わるかは分からない。故に、教えても構わないだろう部分しか話してなかった。五代達との出会いやそれによる思い出。もしくは、セイバー達との出会いや思い出などだ。

「仮面ライダー？」

「うん。アインさんを助けた五代さん達のもう一つの名前」

幼い自分へ話すという状況にも慣れ、なのははどこか妹が出来たような感覚を抱いていた。相手も同じような感覚なのか、自分へ少し甘えるような雰囲気さえある。それが嬉しく思うと同時に、ここにヴィヴィオがいなくて良かったとも思った。

今は、宿舎のベッドで眠っているはずの少女。それがここにいればもっと混乱を招いていただろうから。それと、もう一つなのはは思った事がある。それは、ユーノがなのはを見る目が自分の知るものと違う事。

（どこか向こうのユーノ君は強そうだな。もしかして、セイバーさんだっけ。あの人に鍛えられたのかも）

もし、幼い自分へユーノと結婚さえ考えて話をした事があると教えたら、どう反応するだろう。そんな事を一瞬考え、なのはは自分を叱った。変な事を話して向こうのユーノや自分の未来を壊したくない。そう思ったのだ。

「どんな魔法なんですか？」

「うん……みんなを笑顔にする”魔法”だよ」

変身というものがよく分からず、魔法の一種なのだろうと結論付けたなのは。その不思議そうな幼い自分の言葉に、なのははそう悪戯っぽく笑みを浮かべて告げた。そんななのはの横では、幼いフェイトとアリシアがエリオにキャラと楽しげに話していた。

「フェイトが二人のお母さん代わりにしてるんだ」

「うん。すごく優しいんだよ」

アリシアのどこか感心するような声に、キャラは嬉しそうに頷いた。最初はアリシアにも敬語を使っていたのだが、本人が止めて欲しいと告げたため、今のような話し方になっていた。だが、それに対する違和感もすぐに消えた。アリシアの方が、自分よりも幼いように感じたためだ。

「エリオは槍使いなんだ」

「はい。でも、ランサーさんみたいな使い手とは言えないですけど」

一方、エリオはやはりフェイトと思い敬語が取れない。フェイト

ももうどこか諦めたのか、そのまま話している。話題がデバイスになったため、ストラーダの事を話すと、フェイトがどこか羨ましそうな声で話し出したので、エリオはその理由がランサーにあると感じてそう告げた。

フェイトはその言葉に苦笑。別にランサーと比べている訳ではないと。エリオはその言葉に同じような苦笑を返し、そうとしか取れなかったと告げた。すると、それにフェイトが少しだけ困った顔で謝った。

「ごめん。そんなつもりじゃなかったんだ」

「あ、いえ、僕もそこまで気にしてませんから」

そんなやり取りを見つめ、フェイトはどこか母親のような眼差しを向けていた。光太郎はそれに気付き、小さく笑う。

「不思議な光景だね」

「……はい。でも、何だかすごく嬉しいんです」

光太郎が隣へ来てくれた事に少し嬉しく思いながら、フェイトは感じた事を素直に告げた。そんな二人を見て、アルフがどこか嬉しそうな表情を浮かべて問いかけた。

「おや？ フェイト、そっちは恋人かい？」

だが、その言葉にフェイトが思いつき慌てて振り向いた。

「アルフ！？ ち、違うよ！ 光太郎さんはそんな相手じゃないから！」

「……フェイト、そこまで全力で否定しなくても……」

「あれじゃ、告白しているようなものね。……こちらと同じようになる可能性が高いから、手を打っておかないと」

リニスがやや苦笑いでそう言えば、プレシアがそのフェイトの反応を見て、今後訪れるだろう娘の将来を考えて手を打つ事を考え出す。そんな光景の近くでは、二人のライダーが互いの状況の差異を教え合い、苦笑している。

何せ、一方は士郎の妻になろうと考えていて、一方は士郎への思いは告げずに秘めたままで生きようと考えていたのだから。しかし、双方ともに確かにそう判断する可能性もあると理解出来たために、苦笑していたのだ。

「そうですか。サクラも許可を……」

「ええ。しかし、何か不思議な気分です」

「それは私もです。知識として知っている事と、経験は別ですね」

「そうですね」

互いに並行世界の考えは知っている。だが、まさかこんな風に出会うなどと考えた事は無かったのだ。故に笑う。自分の可能性の一つに。今の自分なら選はないだろう道。だが、それも選ぶ事が無かった訳ではない道。そこに行く自身へ、喜びと嬉しさ、そして僅かばかりの呆れを込めて。

「ライダー達、楽しそうですね」

「うん。でも、すずかちゃんは本当に私に似てるね」

そんなライダー二人を見て、すずかと桜はおかしそうに笑みをみせ合う。だが、桜は視線を隣のすずかへ移してそう告げた。それにすずかも頷いて、思い出すように話し出す。

「ライダー、私を初めて見た時に似てるって言ったんです。私、最初はライダーに似てるのになって思ったんですけど……」

「私に似てるって思って言った。そう教えてもらったんだね」

「はい」

「そっか。……私もそう思ったよ。妹が出来たみたいだなあって」

微笑みながら桜がそう言うと、すずかも同じように微笑みを返した。忍とは違う優しさと雰囲気。確かにライダーが自分と似ていると表現したのが納得出来る何かが桜にはある。そんな風に思い、すずかは桜へ少しだけ悪戯っぽく笑みを覚えて告げた。

——私も同じだよ、桜お姉ちゃん。

——……もう、すずかって意外とお茶目なんだね。

互いに笑みをみせ合いながら、今だけは姉妹として接していいと思う。そんなすずか達を眺め、アリスはイリヤと意気投合していた。何となくだが、波長が合ったのだ。向こうもそれは同じだったらしく、名前を名乗りあっただけで友達になれたのだから。

（でも、何故か友達になりましたよって言ったら驚かれたのよねえ…）

人付き合いが苦手なのだろうか。そんな事を思いながら、アリサはイリヤの話す両親の話に相槌を打っていた。互いに両親と過ごす事が出来なかった幼少期。それだからこそ、たまに過ごせる時は嬉しかった。そんな話をし合ったのだが、イリヤはこの数年それから解放されていたらしい。

今はその頃の話聞いて、アリサは少しだけイリヤが羨ましいと感じていた。自分も常に両親がいてくれ、共に時間を過ごす事が出来たら。そんな風に思うのだ。でも、イリヤはそんなアリサにこう告げた。

—— 私には私の、アリサにはアリサの普通がある。同時に、私からすればアリサが羨ましいと思う事があるんだから。

その言葉にアリサは納得。結局他人のものは良く見えるという事だろう。そう思ったのだ。

「イリヤって大人なのね。アタシも結構だと思ったけど、イリヤには負けるわ」

「そんな事ないわ。アリサの方が大人よ。私は……少しズルしてるようなものだし」

「何言ってるのよ。ズルしたって、子供のままの奴だっているんだから。それに、それを認めるイリヤはそれだけで十分大人じゃない」

アリサの断言にイリヤは少し驚き、嬉しそうに笑みを见せて頷いた。アリサもそれに満足そうに笑顔を見せて頷く。そんな交流をし

ているなのは達とは違い、はやては八神家で集合していた。

「いや、こうなると圧巻やな」

「です！」

揃って同じ言葉を告げる二人のはやて。それに楽しそうに返事を返すツヴァイ。確かに違いと言えば、ツヴァイがいるかないかぐらい。アーチャーと翔一は違いと言えるが、はやてからすれば初めての家族認定という意味では同じだったのだから。

「一度、自分と手合わせしてみたいと思わんか？」

「……それはいいな」

「バトルジャンキーめ……」

「ヴィータちゃんったら……」

「その言葉は言っちゃ駄目って言われたでしょ？」

「気持ち分かるが、言い方を少し考えろ」

「「こうなると本当に鏡のようだな」」

シグナム同士のやり取りに、ヴィータが揃って突っ込み、それにシャマルが二人して苦笑。ザフィーラは呆れたようにため息を吐き、リンはそんな騎士達に楽しそうな笑みを向けた。アーチャーは翔一とはやてとの出会いを教え合い、似ている点と違う点を確認していた。

ツヴァイは幼いはやての隣にアウトフレームをフルサイズにし、寄り添うように座っていた。服はバリアジャケットで代用し、二人のはやての間で満足そうにしていた。

「そうか。君は九歳になる少し前か」

「はい。アーチャーさんは六歳になるくらいだったんですね」

「ああ。しかし、まさか一人で自活出来るようになっていたとはな」

翔一が告げたはやてとの出会った頃の状況に、アーチャーは驚きを隠せなかった。自分と出会ったはやては、家事を教わり上達していった。だが、どうも自分のような存在がいなくてもはやては自力で家事能力を磨いていったらしい。

そう理解し、アーチャーははやてへ視線を向けた。やはり強い女性だと思い、どこか嬉しそうに目を細めた。それに大人になったはやてが気付き、不思議そうな視線を返す。だが、それにアーチャーは柔らかく何でもないと返した。

「む、アーチャーがあないに優しい声を？ はっ！ まさか、大人になったわたしは対象内か！ そうなんか！？」

「……えっと、どういう事やる？」

「多分、貴女を恋愛対象としてアーチャーが認識したのではないかと、主は言っているのでしょうか」

リンがどこか話しくそうにそう告げると、はやては理解出来たという風に頷き、アーチャーへ視線を向ける。確かにいい男だとは思うが、結婚などを考えるかと言われればノーだ。良く知らない

が、幼い自分がここまで懐いているし、話してみた感じも中々好印象。それでも、兄などには良さそうだが、伴侶としては苦勞しなさそうだ。そんな風に思ったのだから。

そう思っ、はやては視線を翔一へと向ける。同じようにいい男だと思っ。性格などの様々な事も知っっているし、互いの事も理解し合っっている。苦勞はあるだろうが、それでも結婚まで考えるかと言われれば……

（アカン！ 何をわたしは真剣に考えとるんや。翔にいはお兄ちゃん…… やったんやけどなあ）

幼い頃に出会った優しい年上の男。明るく家事が出来、でもどこか抜けている。そんなはやての初恋の相手。だが、年の差があまりにも大きいため、どこかで諦めてもいた。それが、あの謎の時間移動のせいで縮まってしまったのだ。

しかも、翔一はあまり外見が変化しなかったせいもあり、今の自分と並んでも違和感がない。たまにロツサやカリムからからかわれるのだ。いつ翔一と結婚するんだと。まだ恋人にもなっっていないし、そんなつもりも今はない。それでも、その言葉にははやては何度もうるたえてしまうのだ。

管理局に入り、年上の男性と接する機会も増えた。だが、翔一以上にははやての心を捉える相手はいなかったのだ。ゲンヤには薄っすらと父親を重ねたが、男として見る事はなかった。ただ、翔一の事を色々と相談して助けてもらったが。

ロツサは本人も認める兄貴分。カリムは姉のようなものだ。故にはやてのそういう事を心配はしてくれているのは分かる。ライン達も、翔一ならばと祝ってくれるだろうとは思っ。だが……

（翔にいは、真魚さんおるしな）

はやての勝手な認識だが、真魚が翔一を好きだと考えていた。無論、それはある意味正しい。だが、それは人として好きであり、異性としてかどうかは分からないのだ。それをはやてが知る事はない。だからこそ、はやては思い切った行動に出られない。真魚に対し、負い目を感じてしまっているために。

はやてがそんな事を思い悩む前で、アーチャーとはやての漫才のような会話が展開されていた。

「私にとって、君はどこまでいつでも保護対象でしかない」

「なら、さっきの優しげな雰囲気は何や？ ナンパ男な雰囲気やった」

「ナンパ……君はどこでそんな男を見た？」

「ドラマ」

「……またか。君は少し虚構と現実を……いや、確かにドラマのような人間もいるにはいるが」

はやてのドラマは全て嘘なのかと言わんばかりの表情に、アーチャーはそう言い替えるが、その雰囲気はどこか呆れつつも楽しそうだ。はやてもそう。こんな会話が楽しくてしょうがないと言っているような顔だ。

それを見つめ、翔一は嬉しそうに頷いていた。自分と出会った頃、はやてはもう一人に慣れていた。そのためか、自分と接している時はどこかぎこちなさが見えたのだが、アーチャーと話すはやてはそんな事はない。元気良く楽しそうに話しているのだ。

（向こうのはやてちゃん、アーチャーさんが好きなんだな。二人つきりでも、ホントの家族みたいだったんだ）

自分も受けた八神家の家族認定。それをアーチャーも受けた。しかも、どうやら自分よりも異常な状況だったにも関わらずだ。そこにはやての芯の強さを見たような気がして、翔一は一人笑う。どんな世界でもはやてははやてだと思ったのだ。

「それにしても、アギトがいないのが残念です」

「そうやな。メガーヌさん家にお泊りやからなあ」

ここにいたはずの親友の顔を思い出し、ツヴァイはそう呟いた。彼女は昨日からルーテシアと会うために出かけていて、そのままアルビーノ家に泊まったのだから。故にここにはいない。居れば、きっとアギトも楽しく会話に加わっただろうと思い、ツヴァイはどこか寂しそうな表情を浮かべた。

そんな風に八神家達もこの状況に適応しつつあった。しかし、スバルやティアナはどこか適応出来ない部分があった。そう、彼女達は英霊達や士郎達との接点が少ない。故に、どこか取り残されたように道場の中の様子を眺めるのみだった。

「……何か不思議な光景だね」

「そうね。大人のなのはさん達と子供のなのはさん達。それが普通に会話してるんだから」

そんな二人に凜が気付き、どこか苦笑を浮かべながら近付いていく。

「貴方達の反応が当然よ。逆に言えば、もうあんな風に馴染んでる方がおかしいの」

「「そうなんですか？」」

「そ。並行世界の自分に会って、違和感なく接してる時点であの子達も大したものよ。それと、それを見ても、こうしてちゃんと自分に整理をつけている貴方達もね」

凜の言葉に二人は互いを見合わせ、苦笑した。それに凜が疑問を抱く。すると、それに気付いたのか二人は苦笑を浮かべたまま、その理由を話した。

「それが出来るのは、五代さんと……」

「翔一さんのおかげかな……」

そして、視線をそれぞれが五代と翔一へ向けた。凜もそれにつられて視線を動かした。翔一はアーチャーとはやてのやり取りをニコニコと見ているし、五代は光太郎と共に土郎と何かを話している。その土郎の表情から察するところ、どうやら正義について話しているのだろう。

土郎の表情がいつも以上に輝いている。一方の五代と光太郎はどこか苦笑気味だった。そんな翔一と五代を見つめ、凜は何となくだが納得した。どちらも異常事態にものほほんとしていられそうだと思ったのだ。良く言えば自然体。悪く言えば能天気。どちらにせよ、こういう状況にも自分を乱す事無く対処しそうだ。そんな風に結論を出したのだから。

「でも、魔法とはね。私達の世界じゃ魔法は一握りしか使えないものだから、ちょっと驚いたけど」

「それ、セイバーさん達も最初思ってたって言っていました。やっぱり、凜さん達の世界とセイバーさん達が元いた世界は同じなんですね」

「バカスバル！ 並行世界だってアーチャーさんが結論出してたでしょ。アタシ達の世界とあの子供のなのはさん達の世界と同じみたいに」

まったく何も分かつちやいないと言わんばかりに、ティアナはスバルの頭を軽く叩いた。それにやや恥ずかしそうにスバルが笑い、それを凜が見てどこか楽しそうに笑みを見せた。仲が良いと感じる事が出来たからだ。どこか自分と楓を思い出させるような関係だったのもあるかもしれない。

（ま、あいつはここまで天然じゃないか……）

考え無しではあるけど。そんな酷い事をさらりと考え、凜は二人へ聞いてみたい事を聞く事にした。魔法の事や管理局の事、そして管理世界の事などだ。何か自分の役に立つ情報があればいいなと思いつつ、凜はティアナへその質問をぶつける。スバルにしないのは何となくだが話を脱線させそうな気がしたからだ。

こうして、スバルとティアナは凜へ自分達の知る限りの話をしていく。そのお返しとして凜からは魔術の話や冬木の話を教えてもらい、交流を深めるのだった……

「……ジェイル・スカリエッティ」

「初めましてと言うべきだね。プレシア・テストロッサ」

場所を道場ではなく居間に移し、二人は会話していた。共に名前を知っている。だが、自分達が抱いていた想像と、目の前の人物が違う事に二人は少なからず違和感を感じていた。だが、その原因が何にあるかはすぐに理解したのだろう。共に苦笑を浮かべた。

「まずは……お礼を言わせてもらっわ。貴方の研究のおかげで、私は娘を産む事が出来たのだから」

「なら、私も貴女に礼を言わせて欲しい。貴女の娘のフェイト君が、私の娘達の未来を守ってくれたのだから」

互いにそう言って複雑な表情を浮かべた。自分が居るべき世界では、おそらくこんな話をする事はないだろう。片や広域次元犯罪者で、片や虚数空間に落ちた者なのだから。だからこそ、言葉を伝えなかった。互いが辿った未来の中には、確かに幸せを掴んだ結果があったのだと、

しばしの沈黙。時計の秒針だけが音を刻む。そして、ジェイルがプレシアにこう告げた。

「覚えていていられるか分からないが、おそらくそちらの私はかなり厄介な事をしでかす。それにフェイト君達是否応無く巻き込まれるだろう」

「……そう。管理局に入るのは、避けられないのね」

「彼女達の性格では、そうだろうね。苦しむ者や困っている者を助ける力があれば、それを使う事を躊躇わない」

「……でしょうね」

そこでプレシアはどこか嬉しそうに笑った。ジェイルの声に、心から心配している気持ちが込められていたからだ。やはり目の前にいるのは、自分が考えるジェイル・スカリエッティではない。そう改めて思い、プレシアは笑顔をジェイルへ向けた。それにジェイルはやや驚きを見せるが、同じように笑顔を返す。

「貴方の忠告、出来るなら忘れたくないわね」

「そう言ってもらえただけでも私は嬉しいよ」

「ふふつ、本当に残念だね。こちらの貴方もこうだったらいいのに……」

「それは言わない約束さ。言い出したらきりがない」

そんな会話をしながら、二人は徐々に話題を研究関係へシフトさせていく。二度と会えぬ出会い。それを少しでも何か形に残したい。そんな風に思いながら……

士郎は感動していた。ひょんな事から聞いた五代と光太郎の夢。それこそ自分が夢見た正義のヒーローの在り方そのものだったからだ。そんな風に士郎が二人へ力説すると、二人は苦笑しながらもそう思ってくれた士郎に嬉しそうに礼を述べた。

更に士郎が二人の正体——仮面ライダーの話を持ち出し、尋ねた。どうしてそんな体になっても、それを人知れず誰かのために使

おうと思えたのかと。みんなへ恐ろしい存在がいる事を教え、一致団結して戦う方がいいのでは。そんな風に思ったからだ。

だが、そんな士郎の言葉に五代も光太郎も少しだけ悲しそうに首を横に振った。そう、二人は知っているのだ。人がどれだけ強く、そしてどれだけ弱いかを。

「士郎君、確かに君の言う通りかもしれない。怪人達の存在を広く世に知らしめれば、人類は一つとなって戦えるだろう」

「でも、考えてみて。子供達はそんな中で笑顔で遊べるかな？ 大人達は頑張って暮らしを守ろうと思える？」

光太郎の言葉を引き継ぐ形で五代が告げた内容に、士郎は返す言葉が無かった。日常に非日常が入り込んだ世界。しかも、それが自分達に牙剥く恐ろしい存在なら、もう心安らかにはいられない。いっどこから恐ろしい怪人が襲ってくるか分からない。そんな中で笑顔を守る事など出来るはずがない。

光太郎も五代もそれを知っているからこそ、人知れず戦う事を選んだのだ。そう士郎は思った。自分が魔術を隠し、使う必要がなければ決して使おうとしなかったのもそれと同じだった。力は争いを止めるが、時に争いを生む。故に、士郎は必要以上の力を求めなかった。それに、もう一つ士郎には気付いた事があった。

（五代さん達の事を知れば、最初は誰もが希望に思う。でも、怪人の脅威が無くなった時、その存在は希望から恐怖へ変わる。そうか、それがあるから仮面ライダーは誰にも知られずに……）

守るべき者達から迫害される事。それをどこかで仮面ライダーは恐れているのではないか。だが、士郎のそれはやっ外的外れだった。

彼らは人々から迫害を受けたとしても、人のために戦える。だが、彼らが自分達の存在を隠し続けたのは、人の弱さを助長させぬため何かあれば仮面ライダーが助けてくれる。そんな風に考えるのを阻止したかったのだ。自分達に頼る事無く人が生きていくように。人が自分達の力だけではどうにもならなくなった時、その理不尽から命を守るために仮面ライダーはやってくるのだから。

「……俺、分かりました。俺も、仮面ライダーになります」

「士郎君……」

「それは……」

「俺、仮面ライダーと同じような生き方を目指します。誰かのためにじゃなくて、みんなのために。どんな事でもいいから、みんなを笑顔に出来るように！」

二人の声に込められた気持ち。それに応えるように士郎はそう笑顔で断言した。目指すのは、仮面ライダーそのものではなく、その在り方。それを聞き、二人は少し驚いたが、すぐに笑顔を見せてサムズアップを送る。それに士郎が嬉しく思い、サムズアップを返す。こうして、正義の味方に憧れるはずだった男は、本物の正義のヒーローと出会い、その生き方を知った。目指すべき者。その具体例を知った事が、今後の士郎の生き方を変えていくとは知らずに……

「……浮いてるよなあ」

「浮いてるッスねえ……」

ノーヴェとウェンディは、姉妹達の間を代表するかのようにようにうめいた。彼女達は道場から離れ、庭へと戻ってきていた。何せ、どこか居場所がなかったのだ。そして、今はノーヴェとウェンディのように何人かに分かれ、この家を徘徊しているはずだ。

ウィノはトーレやセツテ、ドゥーエはクアットロとディエチ、チンクはセイんと、オットーはディードだろう。そんな事を考えて、二人は軽くため息。楽しんでる者達には悪いが、二人はそこまで楽しくなかったのだ。幼いなのは達に会えたのは少し面白くあったが、そこまで。何しろ、彼らは今後別世界の自分達と戦う可能性が高い。なら、複雑な気持ちにもなるうというものだ。

そんな事を考える二人へ接近する者達がいた。

「どうした？ 何か気に入らん事でもあったか？」

「ワタシ達で出来る事なら、改善しよう」

ルビーとオルタだ。二人はノーヴェとウェンディの隣へそれぞれ座ると、その視線を顔へ向けた。

「いや、別に気に入らないって事じゃねーけど」

「ま、アタシらは接点ないッスから」

「そうか。だが、気にするな。ないのなら作ればいい」

「うむ。オルタの言う通りだ。余も初めは桜達と接点など無かったが、今はこうして共に笑い合う事が出来ておる」

オルタとルビーは平然とそう言つて二人を見た。それに二人は互いの顔を見つめ、どちらともなく笑みを浮かべた。真司も同じような事を言いそうだと思つたのだ。ないのなら作ればいい。その内笑ひ合う事が出来るから。そんな言葉が、二人にはとても嬉しく思えたのだから。

故にノーヴェとウエンディは揃つてルビーとオルタへ笑顔を返す。そして、その手はサムズアップを見せていた。それに少し不思議そうな表情を浮かべる二人だったが、何となくそれが今の自分達の言葉に感謝している事だと思ひ、頷いた。

そこから四人は話を始める。とは言え、ノーヴェ達が十二人姉妹と聞いてからは、その話題に終始した。そんな風にノーウェコンビは紅と黒の騎士と友好を深めるのだった……

「やるな！」

「そなたもな」

衛宮邸の庭。その片隅で展開されるトーレと小次郎の戦い。それを見て参加したそうにうずうずしているセツテを、ウーノはどこか呆れつつも微笑ましく思つていた。偶然出会つた小次郎と話している内に、トーレが空戦が得意と聞いた瞬間、小次郎が是非手合わせをとなつた。

元から戦う事が好きなトーレがそれを拒否するはずもない。そして、今の状況となつた訳だ。そんなウーノとセツテの近くにセイバーが現れた。そろそろ昼なので、全員へ希望を聞いてきて欲しいと士郎からアーチャー伝いに頼まれたためだ。

「少しいいでしょうか」

「はい？」

「何か？」

セイバーの声に振り返る二人。それにセイバーは先程の伝言を伝える。それに二人は頷いて、視線をトーレと小次郎へ向けた。セイバーもそれに視線を動かし、小さく息を呑んだ。見事な試合だと思った訳ではない。トーレが極自然に空を飛んでいたからだ。

魔法で飛べる事は知っている。だが、トーレからその根本と言える魔力を感じる事が出来ない。にも関わらず、空を飛んでいる。それがセイバーには理解出来ない光景だったのだから。

「トーレ、小次郎さん、お昼に何か食べたい物の希望はあるかですって」

「特に……ないっ！」

「ふむ、私もだ。ああ、出来れば……和食が良い」

トーレの踏み込みからの攻撃を捌きつつ、小次郎は余裕さえ感じさせながら答えた。それに苦笑しながらウーノは視線をセイバーへ向けた。それにセイバーは頷いて次の相手を探して歩き出す。後ろから聞こえる金属音に、少しだけ呆れるように笑みを浮かべて……

衛宮邸のキッチン。そこでチンクはセインとオットーにディードの四人でまったりとお茶をしていた。許可自体は士郎達から取って

いる。チンクとセインは緑茶。オットーとデイドは紅茶を飲んでいた。そこへ、一人の人物が現れる。

「おや？ 貴方達は……」

「ん？ 確か……リリイさんだったか」

「使わせてもらってるよ」

リリイはセインの言葉に笑みを返し、自分にも貰えるかと尋ねた。それにデイドがどちらがいいかを尋ね、それにリリイが答える。そんなやり取りを聞きながら、オットーがしみじみと呟いた。

「何故か、ここは落ち着きますね」

「そうだね。あたしもそう思う」

「きっとシロウ達とこの家の雰囲気のためでしょう。来る者拒まずですから」

リリイの言葉に四人は士郎の顔を思い出し、確かにと頷いた。何せ、どこか真司のようにお人好しとを感じる相手だったのだから。

「それにしても、まさかリリイさん達が揃って士郎さんのお嫁さんになろうとしているとは……」

デイドがそう言うと、リリイが目に見えて恥ずかしそうに俯いた。それに四人は笑みを見せる。何せ、リリイ達の姿はどこか自分達に重なる部分があったのだ。共に同じ男へ好意を抱いている。その傍でその生き方を支えたい。それは、実に自分達と似ているのだ。

から。

更に、士郎はそれを受け止めたとなれば、彼女達に与える影響は大きい。それは、もしかすると自分達もそうなるかもしれないという事なのだから。

その事をキツカケに、会話を始める五人。士郎の事や真司の事。更には聖杯戦争やライダーバトルなどまで話して、互いにその内容に恐怖した。そして、それを揃って平和的に解決しようとするところに共通点を見出し、五人は笑う。

そうして、それから十数分後にそこへその話題の士郎達が来るのだが、この時の五人はそれを知る由も無かった……

「案内ありがとうな、セイバーちゃん」

「いえ、こんな事で良ければ」

真司の言葉にセイバーはそう笑って答えた。昼食用の買い物を引き受けた真司。それに感謝した士郎が、セイバーに道案内役を頼んだのだ。ついでに荷物持ちとして暇そうにしていたドゥーエ達とランサーを誘い、六人は深山町商店街へ来ていた。

作る物は決まっていらないが、大方の物が出来るように色々買ってきて欲しいと思った士郎は、真司に結構な金額を託して送り出したのだ。

「しかし、のどかな町ねえ」

「あたし、こういう雰囲気好きだな」

「私は……ま、嫌いじゃないわ」

「俺としては懐かしいんだがな」

口々に周囲の光景への感想を述べる中、真司は商店街の外観に何か嬉しい気分になった。自分の暮らしていた日本。そこにいるという感覚を強く感じたからだ。昔ながらの雰囲気を残す深山町。更に商店街も真新しいものではなく、古くからあるような佇まい。

それに真司は久しぶりの買い物に気合を入れて歩き出す。そんな真司の変化に、セイバーはやや不思議そうに思いながらついて行く。スーパーへ向かわず魚屋や肉屋などを見る真司。そして、その目利きを見てランサーが感心したように頷き、残る四人は何が凄いのか良く理解出来ない。

「真司つつたか？ 中々見る目あんじゃねーか」

「そうですか？」

「おう。俺も魚屋で働いてたから分かるが、良いもん選びやがる」

そんな風に話しながら歩く真司とランサー。その後ろを歩きながら、四人は少し微笑みさえ浮かべていた。

「何か男らしい人ね、ランサーさん」

「そうだね。真司兄さんも兄貴っぽいつて言ってた」

「私は真司が主達のような目を持っている事に驚きです」

「あゝ、シンちゃんはお料理とか得意だからね。その関係じゃない

かしら？」

そんな風に六人は買い物続ける。ちなみに、スーパーではなく個人店で買う際は真司はランサーの助言に従い、ドゥーエやディエチ達に頼んだ。無論、おまけを期待してであつた……

土蔵でユーノはギンガと共に魔方陣を見つめていた。ユーノはスバルやギンガと出会った時、すぐにクイントの娘である事を思い出した。そして、ついギンガに聞いてしまったのだ。食費は大丈夫だったのかと。それにギンガは驚きを見せた。何故なら、ギンガはユーノと直接の面識は無かつたからだ。

にも関わらず、ユーノが自分達の事を知っている事に驚いた。だが、並行世界では幼いユーノと自分達が会う事もあるのだと知り、少しだけギンガは笑みを見せた。些細な事から大きな事まで実に様々な違いがあるのだなと思つたためだ。

「……これ、何の魔方陣かな？」

「多分……召喚用のものです」

ギンガの問いかけにユーノはそう答えた。そして、どうして召喚用の魔方陣がと不思議がるギンガへ、ユーノはセイバー達の事を説明した。おそらくセイバー達はここから出現したのではないかと。

その説明にギンガは改めてセイバー達が普通の人間ではない事を認識した。それと同時に、ユーノはどこでも博識なのだなとも。直接の面識はないが、ユーノが無限書庫の司書長なのはギンガも知っている。だから、目の前の少年がいずれ管理局を支える存在になるだろうとも思つた。

「さすが未来の司書長」

「……やっぱりそうなるんですね」

「うん。あ、でも無理矢理って訳じゃないはず。ちゃんと自分の意思で決められるから」

「分かってますよ。それに、僕も出来るのなら無限書庫で働こうと思ってますから」

ユーノの言葉にギンガは小さく安堵。あまり未来の事を言っではいけないと思っていたのに、つい口をついて出てしまったのだ。しかし、それをユーノは気にしていないようだった。むしろどこかで納得さえしていたのだから。

ユーノは、なのは達と共に小学校に通う事を既に決めていた。そして、その卒業後、自分は管理局に入り、無限書庫で本格的に働くつもりだったのだ。それから考えれば、自分が司書長になるのは予想出来る事だ。クロノが冗談めかして告げた言葉。それを思い出せば、余計に。

「……しっかりしてるんだ」

「そっちの僕がどうかは知りませんが、僕は具体的な目標がありますから」

「誰？」

「アーチャーさんです」

その答えにギンガは少し考え、何となくユーノが目指す姿を想像した。そして、アーチャーを思い浮かべ、ユーノがそうなるのを仮定し苦笑。どう考えてもそうなるようには思えなかったのだ。ただ、思考や性格がどうかは分からないため、そこについてはギンガには判断出来なかった。

ユーノはギンガの反応から何となくそれを察し、同じように苦笑した。自分達と関わった事がないギンガにアーチャーのようになりたいと言っても、理解されないと知っていた。そのため、ギンガが見せた反応は実に予想通りだったのだから。

そして、二人の下にもセイバーが昼食のオーダー窺いに現れ、ギンガがそれに目を輝かせるのだった……

黒服の青年は、誰もいなくなった六課の訓練場に佇み、何事かを考えていた。よりもよって、異世界からの干渉を受けてしまった。それにより、世界を超えさせる必要もなかった者達まで送る事になつてしまった事に、彼は申し訳なさを感じていたのだ。

「……彼らを一度こちらに戻す必要がありますね」

全員をこちらへ戻し、そこから五代達四人だけをもう一度それぞれの世界へ送る。それしか方法はない。そう結論付け、青年は意識を集中する。元来彼が生み出した人である光太郎や翔一の気配を探り、それを捉える事はそう困難ではない。

程なくして気配を掴み、こちらへ戻そうとした。しかし、その瞬間何かが彼を止めた。それは、白服の青年。服装以外が彼とまったく同じ存在だ。

待ちなさい。

貴方は……

もう会う事はないと思つていた存在の出現に、黒服の青年は驚きを隠せない。それに白服の青年は頷きを見せ、告げた。

——もう少し待ちなさい。今、かの者達はかけがえのない出会いをしています。それが綺麗に終わるまで、少しだけ待つて欲しいのです。

……いいでしょう。ですが、今回の記憶は残す訳にはいきません。

ええ。ですが、完全に消す事も出来ないでしょう。それぐらいは許してあげてください。

こうして、神とも呼べる二人の会話は終わった。黒服の青年は眼前から白服の青年が消えるのを見届け、小さく笑みを浮かべた。自分も変わったものだと思つたのだろう。かつて激しい争いをした相手。それとあのようによやかに話す事が出来たのだから。

その変化をもたらしたのが、アギトであつた事を思い出し、青年は楽しそうに笑う。人の可能性とは、大したものだと。そう心から思いながら……

— — — — —

- - - - -

前編終了。平和な感じだという意見が多かったので、こんな感じ
です。

……ご満足して頂けたでしょうか？ 後編は、別れの話へ……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1591r/>

それは、夢のような時間

2011年8月1日22時12分発行